



母親を撮影する著者

武澤 忠

(NTV情報カルチャー局チーフディレクター)

みんがひ
語り
ろう
民放史

題字 中川 順

被災者家族として…テレビマンとして…
母を撮り続けた3年間の軌跡

雲仙普賢岳大火砕流、阪神淡路大震災、等々：今まで、様々な災害や事故を最前線で取材してきたが、正直言っても心の中ではどこか「他人事」だったかもしれない。今回、自分の家が被災するまでは…

2011年3月11日、東日本大震災。当時、日本テレビのお昼の生情報番組「DON!」の総合演出をしていた僕は、福島県相馬市の実家が被災。そしてその後、自らカメラを回し、「被災した実家の母」を撮り続けた。

その中で感じた被災地のリアルな苦悩、葛藤：そして見つけた小さな希望。

テレビマンとして、被災者の息子として、この3年間感じた事を、ここに書き記します。

すべては「忘れずに伝え続ける」ために…

「その瞬間、この世の終わりかと思った」

2011年3月11日午後2時46分。

一週間の生放送を終え、ほっと一息つき、翌週分の打ち合わせが

てら弁当をかきこんでいるときだった。東京・汐留にある日本テレビのオフィスビルが突然大きく揺れる。

その時僕がいたのは29階の会議スペース。ただならぬ揺れに思わず箸をおき、咄嗟にテーブルを握った。

「やばい…これはでかいぞ」瞬間、背筋が凍りつくのを感じた。

揺れは徐々に激しくなり、周囲に女性スタッフの悲鳴が響く。移動式ロッカーが右に左に激しくぶつかり、凄まじい音をたてていた。

ようやく揺れがおさまり、思わずテレビ画面を見る。「東北震度6強」。

瞬間、福島県相馬市でひとり暮らし母・順子の顔が浮かぶ。すぐに携帯から電話をすがるまったくつながらない。卓上電話を使ってもダメだった。

「お台場が燃えているぞ！」

誰かの声に窓際に面した喫煙所へ駆けつける。見れば、お台場のフジテレビの裏手から、黒い煙が立ち上っていた。

正直、「この世の終わり」かと思った。母とは相変わらず連絡が取れない。

そのとき耳に飛び込んできたア
ナウンサーの音声に、僕は思わず
目の前が真っ暗になった。

「福島県相馬市岩の子には7.3
メートルの津波が押し寄せ、壊滅
状態です！」

そこはまさに実家だった。78歳の
母が、ひとり暮らしていた。

「なに言ってるの!?! 壊滅って
なんだよ・・・」

言葉を失っている僕の目に、各
地の凄まじい津波の映像が飛び込
んできた。

そしてカメラを回した

その後、実家の近所に嫁いだ姉
からメールが入る。姉の一家と一
緒に避難し、母も無事だという。

ほっと胸をなでおろしたが、そ
の後の一文に胸を押しつぶされた。

「家はもう、住める状態ではあり
ません」

震災直後の騒乱の中、デイリー
の情報番組の総合演出として、す
ぐに実家に帰るわけにはいかなか
った。地元の公民館に避難してい
た母は、幸いにも無事だった姉の
嫁ぎ先に身を移し、お世話になっ
ていた。



被災地取材時の著者

ようやく仕事に一区切りついて
帰省したのが3月末。デコボコな

ままの高速道を高速バスで走ると、
やがて目に飛び込んできた信じが
たい光景に愕然とする。道路の脇
に、数えきれないほどの流された
車や破壊された家の残骸が散乱し
ている。瞬間、自分の中で何かが
音をたてて凍った。以来しばらく、
何を見ても涙は出なかった。

涙を出す機能すら、破壊された
のかもしれない。

実家に帰り、母と一緒に家の様
子を見に行く。床上まで津波が押
し寄せ、濁流で畳は泥にまみれ、
物が散乱、壁は崩れかけ、確かに
とても住める状態ではなかった。

震災のわずか3か月前に事故で

亡くなった父が、好きだった「昼
寝用」のソファも、無残に泥だ
らけとなっていた。

今回の津波で辺り一面は瓦礫に
まみれ、親戚がふたり、流されて
死んだ。

「命助かっただけ良かったね...」
とりあえずかける言葉が見つから
ず、僕がそうつぶやくと、母は否
定するようにこう言った。

「命助かって良かったんだか、ど
うだか...この年で(当時78歳)

家がこんな風になってしまっ
て...これからの苦労考えたら、

いっそ一気に逝った方が楽だった
んじゃないか、って思うときある
よ。お父さんを見送る役目は終え

たんだから、いま余震が来てつぶ
れたって...もうどうなったって
いよ。

命なくした人たちには申し訳な
いけどね...」

50年連れ添った夫に先立たれ、意
気消沈していた矢先の今回の震災

：母は、明らかに生きる希望を失
っていた。

「このままではまずい...」長男と
して何とかしなければならぬが、

今の自分に何が出来るのか...その
時、答えは見つからなかった。

その夜、近所に住む姉夫婦の家
に僕も泊めてもらった。救援物資
や水のタンクなどが散乱する中、
ふと足元にあるスーパリーのチラシ
に目をやった。その裏には、母が
何かを書き綴っていた。



故郷の風景をバックに 母・武澤順子

「3月11日...」

あの時猛り狂い 咆哮し
大地を襲った海は

本当にこの海だったのか
今は静かに潮騒の中に

白い小さな波頭が見えるだけ
悠々と流れていく雲よ

お前は何を見ていたの
小さな蟻のように

人々がもがき苦しむさまを
黙って見ていたの?」

見た瞬間、頭をハンマーで叩かれたような衝撃をおぼえた。そこには、誰にもぶつけようのない憤りや苦悩が、赤裸々に綴られていたのだ。

今回の震災に遭い、テレビカメラの前でインタビュに答えられる人たちは、全体から見ればほんの一握り。多くの人が、それどころじゃなかったり・・・「うちなんか、他所に比べて被害は浅いから・・・」と表に出ることを嫌がったり・・・。



被災地の取材を続ける筆者

そしてマスコミは、(自分を含めて)どうしても「被害の大きい」所ばかりに目が向いてしまう。しかし、一見被害が小さい一軒

一軒それぞれに、それぞれの苦悩があることを見過ごしては来なかったか？

世にでない「声なき声」の中にこそ、「被災地の本当のリアルな本音」があるのではないか！？

番組になるかどうかはわからぬが、とりあえず僕は自分自身の家と家族を、「記録」としてカメラで残すことを決意した。

震災の記憶を語り継ぐためにも、風化させないためにも、それが、実家が被災したテレビディレクターの務めであるような気もした。

そして一本の企画書を書く。タイトルは『ディレクター被災地へ帰る』。

カメラを回し始めた当初、母はとも嫌がっていた。

「他にもっとひどい被害の人たちがいっぱいいるのに、被災者ぶつて画面にでるなんておこがましい」と固辞した。しかし、「被害が大きい所だけ目を向けてたら真実は伝わらない！」と僕も食い下がった。

震災から2か月が過ぎたころ、母を伴って母が育った新地町へ。そこは海から押し寄せた流木や瓦礫に埋め尽くされ、美しかった

田園風景は凄まじいまでに一変していた。

「ある意味、戦争より怖いよ。戦争は憎むべき相手があったけれど：天のしたこと、憎みようがないじゃない」

母の言葉に、返す言葉は見つからなかった。

その頃、母は津波で半壊した実家を、毎日片付け続けていた。

「何とかお父さんのご位牌を置くようにしなきゃ。それがお母さんの務めだもの」

築50年：家族の思い出がしみついたこの家を、このままにしてはおけない。

母は東京に来ることも拒否し、「この家に嫁いだんだから、ここで死ぬよ」と口癖のように言いながら、来る日も来る日も片付け続けていた。

しかし、そんな生活にも終止符がうたれる。「半壊状態」だった我が家は「放置しては危険」という行政の判断から、「解体」されることが決まった。

震災から7か月：2011年10月のことだった。



解体された家の前で・・・母・順子

泣きながらカメラを回した日

解体当日：築50年の思い出が染みついた我が家がなくなる：老朽化ではなく、津波のせいだ：父の遺影を手に持ちながら、母は崩れゆく家を見守っていた。

ユニボが、丁寧に服を一枚一枚脱がせるように壁を剥ぎ取り、柱を引き抜いていく。

しかし、父がお気に入りだった「茶の間」の柱は、最後のあがきか、ビクともしない。震度6にも耐え抜いた屋敷が、最後の意地を見せているようだった。

「家が泣いてるよ：負けるもんかって泣いてる。お父さんの死にざまと一緒だ。」

こんだけ踏ん張って：あっぱれ

だ」
父の遺影を胸に抱えながら、誇らしげに母が言う。

このとき、カメラを回しているのが辛くなった。

テレビマンとして、記録しなければ、という気持ちと、長男として、家がなくなる瞬間くらい感傷にひたりたいという気持ちが交錯する。

しかし、カメラを回し続けた。「俺はディレクターだ」と、自分に言い聞かせながら。：職業意識がわずかながら、センチメンタリズムを凌駕していた。
やがて、茶の間の柱も大きく揺れる。

瞬間、父の生前の笑顔が脳裏をよぎった。この部屋は、父にとつて「小さなお城」だった。

その茶の間がなくなる…ついに力尽きたように柱が倒れ、壁が崩れた瞬間、母が目を伏せた。そして今まで：父の葬儀のときも気丈に泣かなかった母が、その瞬間から慟哭をはじめたのである。母親の泣き顔を見るのは、辛かった。

カメラを回しながら、その顔を見ていられず後ろに回り込む。再

び土煙をあげて壁が倒れこんだが、何度ピントを合わせてもうまく合わない。気が付けば、自分の涙で、フラインダーがよく見えなかった。：ディレクター失格だ。：



解体した家で…著者

思えば、随分親不孝してきた。子供の頃、ヤクルト配達をしていた母と外ですれ違ったことがある。この時、一緒にいた友達の手前恥ずかしく感じたのか、無視してしまつた。：

「真つ黒に日焼けして働く母」の何が恥ずかしいというのか…その時の、母の寂しそうな顔は、今でも忘れられない。

今回も震災がなかったら、こんなにも密に母と会うこともなかったら、

たろう。津波で多くのものを失ったが、同時に、いろんな事に気づかせてくれた。

翌日、母を伴い再び母が育った新地町へ。

5月に来た時、瓦礫に埋め尽くされていた大地には、今は雑草が生い茂っていた。

まばゆく輝く緑に目を細め、母はつぶやく。

「雑草は踏まれても踏まれても立ち上がる。それが雑草の運命：人間だつて立ち上がらなきゃね。」

久しぶりに聞いた母の前向きな言葉に、カメラを回しながら僕は、思わず涙があふれそうになった。

そして日記にはこう書かれていた。

「おーい、雲よ：

あの日の雲ではないだろうけど、あの日の私でもないんだよ。

あれから：すっかり、生きてきたんだよ。

塩水にも負けずに雑草が生き延びた。虫も生きている。

ならば、人も生きなければ…生きてやろうじゃないの！」

震災から1年後、撮り続けた我が家の1年間の記録は、一時間のドキュメンタリー番組になった。

『リアルワールド デイレクター被災地へ帰る 母と僕の震災365日』(2012年3月放送・番組審議委員会推薦・平成24年度文化庁芸術祭参加)。

テレビディレクターである息子が、震災で被災した母親を撮り続けながら「家族とは何か」を自らに問いかけるセルフドキュメンタリー。この番組は、こんなナレーションで始まる。

「これは震災のドキュメンタリーではない。

震災でも壊れなかった、家族の絆の物語」。

ある種、極めて特殊なこのドキュメンタリーは大きな反響をよんだが、中でも注目されたのが番組で引用した母・順子の「震災日記」だった。誰に読ませるためでもなく、赤裸々に綴られた78歳の被災者の心情が、多くの視聴者の共感を呼び、やがて複数の出版社から書籍化の依頼がくる。

そして2012年7月、『生きてやろうじゃないの! 79歳 母と息子の震災日記』(武澤順子・忠 共

著 青志社) が上梓された。



その後発行された本「生きてやろうじゃないの! 79歳 母と息子の震災日記」

『生きてやろうじゃないの!』出版。そして思わぬ運命の波紋

「その後も僕はカメラを回し続けた。母は次第に生きる気力を取り戻し、日に日に力強くなっていったように見える。でも本当は母は、必死に「元気になる自分」を演じていたのかもしれない。息子である僕に、心配をかけるように…」



青少年読書感想文全国コンクールで 全国学校図書館協議会 会長賞を受賞した 長田瀬良さんと

そして本の出版により、思わぬ出会いが生まれる。

『生きてやろうじゃないの!』を読んだ静岡の中学1年生が書いた読書感想文が「青少年読書感想文コンクール」で賞をとり、その表彰式に母も招待された。そしてそこで感想文を書いてくれた13歳の少女と出会い、今でも学校ぐるみの付き合いが続いている。

そして母の言葉に感動したという福島県いわき市在住の歌手・箱崎幸子さんが「お母さんが書いた言葉は是非歌にしたい」と作詞を依頼。本場にCDとして完成し、『生きてやろうじゃないの』作詞・武澤順子 歌・箱崎幸子 キングレコード)、地元いわき市でそのお披露目コンサートが行われ、母も招待された。

歌を聴いた女性のひとりが、インタビューにこう答えてくれた。「生きてやろうじゃないの!」って言葉：聞けばそうか、って思うのに、なのでその言葉が自分の頭の中に思い浮かばなかったかなあ、ってことを感じました。素晴らしい言葉ですよね。私も、頑張らなきゃ…」

自らも被災し、目に涙をためて

語る女性を見て、すべてが報われた気がした。

そして今年3月：3年間撮り続けた記録を 『リアル×ワールド 3YEAR S 母と僕の震災日記』として放送。(3月8日、関東ローカル)その番組を編集しながら感じたのは、「日本女性の逞しさ」であり、「転んでもタダでは起きない東北人魂」だった。

放送後たくさんのメッセージをいただいたが、そうした声を聞いて、母がそれを生き甲斐に感じ、より一層元気になっていくということが、息子として嬉しい限りである。

そしてひとつの発見をした。「“個”をとことん追求すれば、それは“普遍性”につながる」ということを。

あるとき、会社のとても偉い方から直接電話をいただいた。「番組素晴らしかったですよ。ただ、あの日記は本当にお母様が書かれたの?」

同様の事を何人にも言われていたので、苦笑いしながら「本当で

すよ!僕にはあんな文章書けません!」と答えた。

「素晴らしい文才ですね。お母様は国語の先生か何かされていたの?」



「生きてやろうじゃないの!」語る母・順子

「いえ・・・普通の主婦です」そう答えたが、本当はこのとき、胸を張ってこう言いたかった。「僕の母は、日本一のヤクルトおばさんです!」と。

【資料提供】日本テレビ放送網(株)